

英語授業における教師のインタラクション・パタンの可変性に関する研究

— Team teaching / Non-team teaching の比較において —

深澤 清治・石原 義文*¹・小茂田 由美*²

(1998年10月1日受理)

A Study of the Variability of Teacher' Interaction Patterns in Team Taught and Non-Team Taught English Language Classrooms

Seiji FUKAZAWA, Yoshifumi ISHIHARA*¹, and Yumi KOMODA*²

The English language classroom has been shown to have a distinctive interactive pattern which operates between teachers and learners: Initiation-Response-Feedback, or IRF. This ritualized teacher-controlled communication pattern seems to be particularly suited to the Japanese cultural context. However, can a teacher modify his/her interaction strategies in the classroom to fit such instructional patterns as team teaching? Or do the teacher's interaction strategies remain the same regardless of external changes? In the present study, two classroom discourses were observed and analyzed in terms of teacher-learner interactions to investigate whether there was the variability in teachers' interaction patterns. It is hoped that the result of this study will contribute toward raising English teachers' awareness of interaction modifications in classroom settings.

Key words : Team-teaching, classroom discourse analysis, インタラクション、英語科授業分析.

1. はじめに

外国語としての英語教育というコンテキストにおいて、英語授業は学習者にとって唯一のコミュニケーションの場である。コミュニケーション志向の英語教育の流れの中で、英語の形式面に関する操作的な練習だけでなく、限定された場面の中でいかに英語を使った自然なコミュニケーションの機会を組み入れるかに大きな関心が向けられてきた。

しかしながら、教室というフォーマルな状況は、教師と学習者間の独特なコミュニケーション・パターンを形成してきた。すなわち、誰が先に発言するのか、誰が応答するのか、自発的か他発的か、など、教室の中で学習促進のために期待されるコミュニケーション構造への参加のためのルールに精通することを Wilkinson (1982) は classroom

communicative competence と名付けた。また、それは学習者のおかれた教室という文化環境の中で、教師と生徒のインタラクション・ルールとして形成されてきたものと言えよう。

前研究において、深澤・小西 (1997) は、日本の中学校英語授業における発問に特有に見られるコミュニケーション・パタンの存在と特徴を initiation act, response act, feedback act の3段階からなる IRF 構造として確認した。さらに、それが教師-生徒のインタラクションをどのように促進あるいは阻害するかについて調査・分析を行った。しかし、教師のコミュニケーション・パターンは、教師内行動として不変であるのか、あるいは外的要因によって、例えば team teaching などの授業形式の変化によって、教師内行動に可変性が見られるのか、は課題として残された。

そこで本研究では、英語授業に見られるコミュニケーション・パターンが、同一教師内 (教育実習生) において可変性を有するのかを検証するため、

* 1 広島大学附属中・高等学校

* 2 広島市立安佐北高等学校

外国人講師との team teaching および教師ひとりの授業という2つの異なる授業形態によって教師-生徒のインタラクション・パターンが変化するかどうかを調査・分析することを目的としている。

2. 2つの授業形式によるインタラクション・パターンの分析

(1) 視点

本研究の目的は、Team teaching/Non-team teaching という2つの指導パターンにおいて、一人の英語教師（教育実習生）の classroom interaction が変化するのか、変化するとすれば、どのような特徴を持つのかを見いだすことにある。分析にあたっての調査視点として次の3点を設定し、比較授業分析を行うことにした。

- 1) 英語/日本語使用比率に変化が生じるのか
- 2) Interaction の方向について (JTE → ALT, ALT → Student (s) など) 変化があるか
- 3) Team teaching/Non-team teaching によってどのように教師内 interaction strategy が変わっているのか、幅を広げているのか

(2) 調査資料と方法

(a) 調査資料

今回の調査では、以下の資料をもとに分析を行った。

[Non-team teaching]

平成9年10月8日(木)教育実習生による中学校1年の英語授業録画

[Team teaching]

平成9年10月15日(木)教育実習生と外国人講師（イギリス人）による中学校1年の英語授業録画

(b) 研究方法

近年の授業分析研究では量的あるいは質的な研究方法を対立的よりも補完的にとらえるのが一般であり、本研究でも量・質の両面から分析を実施した。具体的には、量的研究では2つの英語授業の transcription 全体を分析対象として発話の頻度などを数量化したのに対し、質的研究では transcription 全体から特徴の見られる場面を抽出、焦点化して、教師あるいは生徒の個々の発話およびその連続としての教師内談話（classroom

discourse）を一単位として分析を行った。質的研究のための具体的な発話カテゴリーの説明については重複を避けるため後述し、さらに transcription は資料として本論文の最後に付した（Appendix 参照）。

量的視点（transcription 全体を分析する）

- 日本語/英語の出現比率
- 発話の方向別頻度（JET/ALT/Ss）

質的視点（transcription から抽出した excerpts の分析）

- 発話のカテゴリー付け
- コミュニケーションパターン（IRF）
- display/referential questions ratio

(3) 量的分析の結果と考察

1) 日本語/英語の使用比率

Team teaching と Non-team teaching の授業形態において、日本語と英語の使用比率がいかに変化するかを分析してみると、表1のような結果を得た。なお、教育実習生、外国人講師を以下では便宜上、それぞれ JTE、ALT と略称で表している。

表1 Team teaching/Non-team teaching における日本語・英語使用頻度

Speaker(s)	Language	TT	Non-TT
JTE	English	171	145
ALT		113	-
Student		5	4
Students		55	18
JTE	Japanese	29	176
ALT		0	-
Student		2	15
Students		7	1

〈Team teaching〉

(a) 英語・日本語による発話全体の分析・比較

授業全体での発話382文中、200文（約52%）が JTE、113文（約29%）が ALT、69文（約19%）が生徒によるものである。そのうち、英語による発話の総数は344文（約90%）、日本語による発話が38文（約10%）で、9：1の割合で、ほとんど英語で授業が展開されている。

(b) JTE/ALT/Ss それぞれの英語・日本語による発話の分析・比較

JTE による発話数200の内訳は、英語171 (85.5%)、日本語29 (14.5%) で約6 : 1の割合で英語使用が圧倒的である。ALT は当然のことながら英語のみの発話となっている。生徒達 (Ss) の発話は、全体の発話数69のうち、英語60 (87%)、日本語9 (13%) で6 : 1の割合となっている。

次に英語による JTE/ALT/Ss による発話総数344文のうち、171文が JTE の発話となっており、ほぼ半数 (49.7%) を占めている。次いで、ALT の発話が113文で全体の1/3 (32.8%) となっており、英語による発話の約8割が教師側からのみのものという結果となる。

教師らの発話内容は、discourse marker 程度のものが多く、JTE は主に、“OK.” (44回)、“Good.” (2回)、“Ahhh.” (1回)、“Oh.” (1回)、であるのに対して、ALT は、“OK.” (17回)、“Good.” (8回)、“Ahhh.” (2回)、“Oh.” (4回) である。JTE は、確認・承認の意味での“OK.” がほとんど、誉め言葉は“Good.” の2回のみにとどまっている。一方、ALT は、よく生徒を誉めており、反応もよい。

また、生徒側からの英語による発話は、個人および全体で60 (17%) である。内容として、教師らの後に続いて繰り返すを行う口頭練習が大半を占めているので、個人の自発的な発話は少ない。

これに対して、日本語による発話割合を JTE と生徒の間で比較をすると、JTE の日本語による発話は、日本語発話全体の38文中29文 (74%) に及び、7割以上が教師の発話となっている。JTE は、ALT の英語をわかりやすくするために、日本語を用いる場合が多く、英語による言い換えの限界が感じられる。また、活動の場面で、JTE が活動の説明を日本語のみで行っていることもあげられる。

〈Non-team teaching〉

(a) 英語・日本語による発話全体の分析・比較

授業全体での発話359文中321文 (約89%) が JTE、38文 (11%) が生徒の発話である。教師が9割近く発話をしている。英語による発話は全体で167文 (46.5%)、日本語が192文 (53.5%) となっ

ており、英語より日本語のほうがやや多く使用されている。

(b) JTE/S/Ss それぞれの英語・日本語による発話の分析・比較

JTE の発話は321文で、そのうち英語が145文 (45.2%)、日本語が176文 (54.8%) で、日本語の発話が多い。発話内容は、英語では単文から2~3語程度の発言が多く、“Ok.” が7回、誉め言葉は“Good.” の1回にとどまっている。

一方、日本語の方は、活動の説明や英文・単語の意味を言うときに用いられ、一文の量は非常に長い。Discourse marker レベルでは、「ね」(18回)、「じゃあ」(28回)、「はい」(28回) と類出している。こういうことばを、“Ok.” “Well.” “Now.” など英語による comprehension/confirmation check のための表現で補えば、英語を話す雰囲気作りに役立つであろう。

全般的にみると、授業全体での発話総数は、TT で382文、Non-TT で359文となっており、大差はない。しかし、英語と日本語の発話比率に大きな差異が生じている。TT における英語と日本語の発話数は、それぞれ、344文と38文で、圧倒的に英語が多いのに対して、Non-TT の方は英語167文と、日本語192文で、日本語による発話が、英語を上回っている。この英語による発話の減少は、TT の際、ALT が JTE に次いで英語を話しているのに対して、Non-TT では、JTE 自身の英語の発話が171文から145文に減少しているためである。その上、生徒全体の発話数が、TT での55文から、Non-TT では18文に減っているのも原因の1つにあげられる。

一方、TT では、約1割しか話されていなかった日本語が、Non-TT では英語を上回って使用されている。これは JTE の日本語による発話が、TT では29文であったのに対して、Non-TT では176文に飛躍的に伸びているからである。

TT では極力、英語を使用しようとしていた JTE は、Non-TT ではほとんどの発話が日本語になっている。このことは、生徒達の英語による発話数にも影響を与えている。すなわち、TT よりも Non-TT のほうが、生徒の日本語使用がより顕著である。

発話比率からみれば、2つの授業とも教師中心

の授業展開であるのが分かる。

2) 発話の方向別頻度

〈Team teaching〉

ここでは、教室内の3者間の活発なインタラクションが促進されているかを後づけるために、前節で調査したJTE、ALT、S(s)の3者毎の発言頻度に対して、3者間の発話の方向を調査する。1つの発話毎の方向を記録した結果が表2の通りである。

表2 Teaching/Non team teaching における発話の方向別頻度

Direction	TT	Non-TT
JTE→S	4	20
JTE→Ss	27 (12)	20 (15)
JTE→ALT	50	
ALT→S	4	
ALT→Ss	29 (20)	
ALT→JTE	44	
S→S	1	0
S→Ss	0	0
S→JTE	5	21
S→ALT	3	
Ss→S	0	0
Ss→Ss	0	0
Ss→JTE	26	17
Ss→ALT	30	
ALT→JTE/Ss	7 (5)	
JTE/Ss→ALT	7	
Total	237	78

() は練習の回数

これによると、まずJTE→ALT、ALT→JTEがそれぞれ50回、44回と最も多い。教師間のやりとりが中心になっていて、この間、生徒は聞き役になっているのがわかる。

生徒の活動は、JTEとALTから与えられた質問や、練習が中心になっている。具体的には、JTE→Ssが27回(うち12回が練習)、ALT→Ssが29回(うち20回が練習)、ALT→JTE/Ssが7

回(うち5回が練習)となっている。生徒発の発話は合計としてはSs→JTE、Ss→ALTが26回、30回と多いが、これは練習がほとんどで、自発的発話は極めて少ない。

〈Non-team teaching〉

JTE→S、JTE→Ssがともに20回、またS→JTEが21回、Ss→JTEが17回で、一見、教師と生徒個人・全体間で活発なやりとりが行われているようであるが、JTE→Ssの20回のうち、15回は口頭練習のためである。

〈TTとNon-TTの比較〉

TTでもNon-TTでも、教師と生徒間のturn-takingが活発であるが、これは、いずれも教師が発する例文(英文)を、生徒があとに続いて練習するというものがほとんどである。

また、TTとNon-TTの共通点として、生徒間のやりとりがTTでのS→Sの1回しか行われていないことに象徴されるように、生徒同士のやりとりが少ないのは、生徒達が自発的というより、教師側から導き出された受け身的な応答・反応をしているためと言える。

発言ターン自体の頻度を見ると、Non-TTよりもTTのほうがより頻繁に行われている。これは、ALTが潤滑油としての働きを十分に果たしているためであろう。するとNon-TTにおいて、JTEだけで授業を教室内のインタラクションを円滑かつ活発にするのは非常に難しいことが結果として浮かび上がってくる。

3) 考察

以上の量的分析の結果を概略すると、第1に日本語と英語の使用頻度から見ると、TTにおけるJTEの英語使用回数はNon-TTを上回っている。同様に、生徒の場合も、TTの方が、英語使用回数は、Non-TTの3倍となっている。TTにおいては、極力、英語を使用しようとしているJTEの姿がうかがえるとともに、その影響から、生徒も英語を多く使用するようになっている。つまり同一のJTEの授業であっても、TTの授業形態を取った場合、ALTの影響で、英語を多く使用するようである。このことは、英語のインプットとアウトプットが共に増えることになり、望まし

いことである。

第2にJTE/ALT/Ssの3者間のインタラクションの方向については、TTにおいて教師間(JTE-ALT)のやりとりが最も多い。その間、生徒は聞き役であり、英語のインプットが多くなる。また、生徒とJTE/ALTとのinteractionは、Non-TTよりもTTのほうが頻繁になされ、ALTが潤滑油、触媒としての働きを十分に果たしていると言える。

Non-TTにおいて、JTEは英語を意識して使用することが必要である。たとえば、簡単なdiscourse markerレベルの英語を使用することにより、TTとNon-TTの2つの授業形態のいずれにおいても英語を使う雰囲気作りに努めることが大切である。

(4)質的分析の結果と考察

(a)発話のカテゴリー

これまでに、教師と生徒の発言の量的な面を分析してきたが、ここではその発言の質的なもの、すなわち言語行為・機能(function)の面から、2種類の授業形態において特に教師のfeedbackにどのような構造の相違があるかを検討する。

教室での発言では一定のパターンがあると言われており、Lynch(1996)によれば、次のような3段階の言語行為から成立しているという。

INITIATION ACT (teacher)

RESPONSE ACT (students)

FEEDBACK ACT (teacher)

このパターンを基本にして、さらに発言を細分化するために、Nunan(1989)の引用したBowerの分類を採用した。分類項目は以下の通りである。

1. Responding (質問に答えるというような、他者の発言に直接的に求められる行為)
2. Sociating (taskに直接関係するものではないが、良好な人間関係を構築・維持するための行為)
3. Organizing (「椅子を寄せて」のようにtaskそのものでなく、taskを行うための準備をさせるための行為)
4. Directing (非言語的な活動を促す行為)
5. Presenting (taskに関して直接関係のある情報を提供する行為)
6. Evaluating (他者の発言に対し肯定的あるいは否定的に評価する行為)

7. Eliciting (他者に発言を促す行為)

さらに教師のfeedback部分の発言内容をよりくわしく見るために、機能別に次のような分類項目を追加した。

8. emphasis (生徒の発話を繰り返して強調し、強化する)
9. expansion (相手の発言をうけてさらに話題を発展させる)
10. confirmation (理解の確認)
11. comment (相手の発言へのコメント)

このような分類カテゴリーを用いて、教師と生徒の注目すべきインタラクションの例を取り上げ、のちの分析のためにラベルづけを行った。(Appendix 参照)

(b)コミュニケーションパターン(IRF)の分析

(a)のカテゴリーを利用して、両授業の指導過程中の教師と生徒のinteractionをIRFの観点から分析する。また、言語機能だけではなく以下の分析項目も設定した。

Initiation	形式 (WH question, Yes-No question あるいは referential question, display question)、回数 (x 2は2回繰り返した ことを示す)、日本語・英語の区別。
Response	日本語・英語の区別、答え方の形式 (word level か sentence level か)
Feedback	日本語・英語の区別、その回数

以下の例は regular teaching における、場面1 (script 参照) での分類例である。

例：T：What's the date today?

S：水曜日。Wednesday [Response-responding
1 word, (Japanese and English)]

T：はい。It's Wednesday. [Feedback-Evaluation
(J)-Presenting + Emphasis (E)]

(T = Teacher, S = Student)

(c)結果と考察

表3は regular teaching (Non-team teaching) における IRF 分析の結果である。ここから regular teaching の特徴を挙げてみることにする。

表3 Regular Teaching における分析

場面	Initiationの機能分類と種類	Response	feedbackの機能分類 (日本語or英語)
1	EI (Dis-Wh/E)x2	1word(J) 1word(E)	Ev(J) - P+Em (E)
2	EI(Dis-Wh/E)x2	1word(J)	Ev(J) - P+Em(E)-Em(E)-Em(E)
3	P(E)-EI(Dis-Wh/E)-EIRef-Wh/E)	sentence(E)	Ev(J) - P+Em(E)
4	EI(Ref-Wh/E)	sentence(E)	Ev(J) - P+Em(E)-Ex(E)-S-S+Em(E)+S(J)
5	P(E)x2-EI(Dis-Wh/J)-P+Em(E)-D(E)-EI(J)	Con(J)	R(J)-Em(E)
	EI(J)	sentence(J)	Ev(J)+O(J)
6	P(E)x2-EI(Dis-Yesno/J)	sentence(J)	Ev(J)
	EI(Dis-Yesno/J)x2	Con(J)	S(J)
	EI(Dis-Yesno/J)	1word(J)	Ev(J)-P+Em(J)-P+Em(E)
7	EI(dis-Yesno/J)x2	sentence(J)	Ev(J) - P+Em(E)
	EI(Dis-Wh/J)	sentence(J)	Ev(J)-P+Em(E)-P(J)
8	EI(Dis-Wh/J)-O(J)-D(J)-EI(Dis-Wh/J)	sentence(J)	Ev(J) -P(J)
9	O(J)-EI(Ref-Wh/E)x2-EI(Ref-Wh/J)x2-O-EI(Ref-Wh/E)	silence	EI(E)
	EI(E)	sentence(E)	Ev(J)-Ev(E)+P+Em(E)x2
10	EI(Ref-Wh/E)	half-sentence(E)	Em(E)-P+Em(E)-Con(J)-P(J)
11	P(E)x2-S(J)-EI(Dis-Wh/E)x2-O-EI(Dis-Wh/J)-EI(Dis-Wh/E)	Word(J)	EI(J)- P+Em(J)-P+Em(E)x2-O(E)x2-EI(Ref/E)x2-Con(J)

(凡例)

R = Responding, S = Sociating, O = Organizing, D = Directing, P = Presenting, Ev = Evaluating, EI = Eliciting, Em = Emphasis, Con = Confirmation, Com = Comment, Ex = Expansion,

() 内 Ref = Referential Question, Dis = Display Question, Wh = Wh-q uestion, Yesno = Yes-no question, E = English, J = Japanese

i) 生徒が教師の発言に対し、1対1で対応するだけでそれ以上の発話の発展がないこと。さらに、教師が生徒の response に対して Ev-P + Em 「評価-提示+強調(正解の繰り返し)」でのみ対応し、その発言をとらえてさらに会話を発展させていない。(すなわち会話のキャッチボールのパターンができていない)

ii) feedback の内、evaluation がほぼ全部日本語で行われているのが、特徴である。IRF 分析の対象となる以外の場面、例えば説明を行って

るところなどでも、返事・あいづち・discourse marker (「じゃあ、次に…」、「はい、それでは次に」等) に日本語が使用されている。途中の指示でも、日本語が多用されている、あるいは、英語を使用しても必ず日本語でその意味内容が繰り返されている。

iii) 場面4までは、ほとんどルーティンワークのようなもので、一種の formulaic speech とでも考えて良いために、question 自体はすべて英語で行われている。場面5以降は新教材の提示という

表4 Team Teaching における IRF 分析

場面	Initiation の機能分類	Response	feedbackの機能分類
1	NNS{P(E)}-NNS{Con(J)}-NS{Em(E)}-NNS{Em(J)}-NS{Em(E)}-NNS{E}{Dis-Wh/E}	word(J)	NNS{E}{Dis-Wh/J}
	NNS{E}{Dis-Wh/J}	sentence(J)	NNS{Ex(E)}-NS{P+Em(E)}
2	NNS{E}{Ref-Wh/E-EI}{Ref-Wh/J}-EI{Ref-Wh/E}-NS{E}{Ref-Wh/E}	half-sentence(E)	NS{EI}-NNS{E}{Ref-Yesno/E}
	NNS{E+Ex/E}	word(E)	NNS{Con(E)}-NS{EI}{Ref-Yesno/E}x2
	NS{EI}{Ref-Yesno/E}	word(E)	NS{Con(E)}-NNS{EI}{E}
3	NS{EI}{Ref-Wh/E}	sentence (E)	NNS{Em(E)}-NS{S(E)}-NNS{E+Ex(E)}
	NNS{E+Ex/E}	Word(E)	NS{Ev(E)}-S(E)}
4	NS{EI}{Ref-Wh/E}	silence	NNS{EI}{Ref-Yesno/E}
	NNS{EI}{Ref-Yesno/E}	nod	NNSEv(E)-NS{S(E)}
5	NS{EI}{Dis-Wh/E}	phrase(E)	NNS{D(E)}
	NNS{D(E)}	phrase(E)	NNS{P(E)+O(E)}
6	NS{EI}{Dis-Wh/E}	sentence(E)	NS{Ev(E)}-NNS{P+Em(E)}
	NS{EI}{Dis-Wh/E}	sentence(E)	NS{Ev(E)}-NNS{D(E)}-NS{P(E)}
	NS{P(E)}	sentence(E)	NS{Ev(E)}
	NS{E+Em}{Dis-Wh/E}	sentence(E)	NS{Ev(E)}-NNS{P+Em(E)-Con(E)}
7	NNS{EI}{Dis-Wh/E}-NNS{EI-Dis/J}	word(J)	NNS{P+Em(E)}-NNS{O}-NNS{Con(E)}
8	NNS{P(E)}-NNS{EI}{Dis-Wh/E}-NS{R}-NNS{EI}{Dis-Yesno/E}	word(E)	NS{R(E)}-NNS+Students{Ev(E)}
	NNS{P(E)}-NNS{D(E)}		

NNS は non-native speaker, NS は native speaker を表す

*場面 8 以降は、ドリル形式になっているので分析は行わなかった

こともあって、急に display question が増加している。しかもほとんどが日本語を介して行われている。英語で発問する場合もあるが、そのあとに必ず日本語で訳がつけられている。さらに、何度も同じ発問をするばかりで、situation 作りをして、発問を明確化する試みがなされていないことが多い。

次に、表4に表された team teaching における

IRF 分析結果の特徴として次の事項が挙げられる。

i) NS の feedback で特徴的なのは evaluation の中での肯定的な評価である “Very good” という言葉と sociating (“Thank you.”) が多く使われていることである。文化の相違から発生するものかもしれないが、日本人教師にはあまり見られない、情意的な feedback であると言える。

ii) 場面 1～4 までに特徴的なのは、NNS の feedback において、英語が使われている頻度が高いことと、*eliciting*、*expansion* が出現していることである。(表 4 場面 2、3、4) さらに興味深いのは、NNS が発問する際には、*eliciting* が日本語で行われているのに対し (表 4)、NS が発問を行う場合は、生徒の発言に対しさらに発言を促すため NNS の *eliciting* が英語で行われていることである。さらに *Evaluation* を詳細に見てみると、*regular teaching* (以後 RT) においては、「はい」「うん」という程度の生徒の発話の正誤に関する評価がほとんどであるのに、TT では、*Good* という肯定的な評価を表す語が出てきている。NS の態度に影響を受けたためと考えられる。

iii) 場面 5～8 は新教材の提示及び導入であるため、*question* はほとんどが *display question* になっている。これは新教材が、「時刻の言い方」「天候の言い方」であるため仕方のないところと考えられる。

上記 i)、ii) で特徴を述べたように、NNS の最も大きな相違は、*team teaching* の feedback において英語使用の頻度が高いことと、英語による肯定的 *evaluation* と *eliciting* の出現である。NS の発問の際にこの特徴が最もよく現れている。このことについて、検討を加えてみたい。推測するに、NS の発問の際に NNS は余裕を持って生徒の反応を見極めることができるのではないだろうか。別の言い方をすれば、NS が発問している間は、自分はクラスの *controller* としての立場を脱している、NS がクラスを支配していると感じているということである。この時に、余裕のある NNS は生徒の *helper* のような役割を演じることができるのではなからうか。生徒の答えは NS の方に向けられて発せられなくてはならないから、生徒もどうしても英語で対処しなくてはならない。そうすると NNS はどうしても、答えを促すために、英語で援助を行わなくてはならない。このような状況から、発生した現象ではないかと考えられる。

Question の形式については、多少 *referential Questions* が TT において多いほかは、ほとんど相違は見られないと言ってよいであろう。この授業計画の作成者が同一の NNS であることを考えれば、いたしかたのないことであろう。

生徒の *Response* の相違は、TT において、やはり英語が多くなっていることが挙げられることと単語レベルのものが多いいことである。*Referential Questions* が比較的多いことから、教師が何とか生徒からの発話を促そうとする姿勢から生じたものと言えよう。

この 2 つの授業の問題点はいくつかあるが、最も重要なのは、feedback で生徒の発言を取りあげて、さらに会話を発展させる工夫が無いことである。これは *sociating* の機能が欠けていることを示している。授業を *communicative* にするには、大げさにゲームやロールプレイを利用することではなく、生徒と教師の発言の発展が *input* を増やし、さらには人間関係の良好な構築を促し、ひいてはそれがさらなる発言を生むことになるのであろう。

結 論

本研究を通して、*team teaching/Non-team teaching* という 2 つの授業形態が英語教師の個人内 *interaction pattern* の変化にどのように寄与しうるか、特に *team teaching* によってどのように日本人の英語教師と生徒の教室内 *interactions* が変化するのかを、実証的に明らかにしようとした。わずか 2 時間の英語授業を分析した限られたケース・スタディではあったが、比較授業分析の結果、英語教師および生徒の *interactions* の特徴は以下の 3 点にまとめられる。

第 1 に、*team teaching* という授業形態を通して、教師言が確かに変化することが認められた。たとえば、英語・日本語の使用率、feedback の発言、さらに生徒の発話においても日本人教師あるいは外国人講師に対する英語・日本語の使用率において顕著な進展がみられた。英語を使うニーズを作り出すという点からは、*team teaching* はその大きな役割を果たしていると言える。また、日本人教師と外国人講師との間のやりとりという *team teaching* 特有の *interactions* も、生徒にとっては貴重な *input* 源であり、その量と質を高めてうまく活用することが今後の *team teaching* においても期待される。

第 2 に、生徒の反応に着目すれば、*non-team teaching* においては句や文レベルでのやりとりが行われていたのに対して、*team teaching* では単

語1語レベルのやりとりが多くなっている。生徒のアウトプットの観点からすれば、実質的には後退としなければならないであろう。しかし、本分析調査では、対象が中学1年生であることがその大きな原因になっていると考えられる。既習の言語材料が極端に少ないこの時期にあって多くを望むことは無理であろう。

第3に、日本人教師と外国人講師の発言の特徴を比較した場合、前研究の指摘と同様に日本人教師からの feedback としての発話に expansion、sociating といったコミュニケーションを円滑にし、かつ継続させるための発話が、外国人講師の発言と比較して少ないことが言える。Team teaching を通して、教師の個人内変化 (intrapersonal modification) のひとつとして、日本人教師が人間関係機能を意識的に取り入れていくことに留意すれば、より活発なインタラクションが可能になると思われる。

最後に、今後の研究課題として研究方法の厳密化を図らねばならない。今回の調査対象は同一教師の授業ではあったが、授業の目的や、受講のクラス、使用教材は一致したものではなかった。また、対象学年が中学校1年であったことから、必ずしも十分なデータ収集がおこなえたわけではない。調査学年を上げて、また調査対象の授業数も増やしてより普遍的な結果を見いだすことを今後の研究の方向として続けていきたい。

【注】

本研究は広島大学大学院学校教育研究科（英語教育専攻）の平成9年度後期「教育実践の研究」の演習において、大学院生（石原義文、小茂田由美、宮原和子、小無田文）との共同研究として実施した調査をまとめたものである。また、研究にあたって広島大学附属東雲中学校の小西英子教諭および広島大学学校教育学部4年生の長原典子さんから、分析のための授業ビデオおよび配布資料の提供を快諾いただいたことにこの場を借りてお礼を申し上げたい。

参考文献

Brumfit, C. and R. Mitchell (eds.) 1989. *Research in the Language Classroom*. Modern English Publications.

Day, E. (ed.) 1986. *Talking to Learn: Conversation in Second Language Acquisition*. Newbury House.
深澤清治・小西英子 1997. 「英語授業におけるコミュニケーション・パタンの研究」『学校教育実践学研究』第3巻、43-50.

Johnson, K. E. 1995. *Understanding Communication in Second Language Classrooms*. Cambridge University Press.

Lynch, T. 1996. *Communication in the Language Classroom*. Oxford University Press.

Nunan, D. 1989. The teacher as researcher. in C. Brumfit and R. Mitchell (1989 : 16-32)

Wilkinson, L. C. (ed.) 1982. *Communicating in the Classroom*. Academic Press.

Appendix (凡例)

R=Responding, S=sociating, O=Organizing, D=Directing, P=Presenting, Ev=Evaluating, El=Eliciting, Em=Emphasis, Con=Confirmation, Com=Comment, Ex=Expansion

Regular teaching (Non-team teaching)

[Situation 1]

T : What day is today? (El) What day is today? (El)

S : 水曜日 (R) Wednesday. (R).

T : はい (Ev) It's Wednesday. (P + Em)

[Situation 2]

T : And What's the date today? (El) What's the date today? (El)

S : 10月 (R)

T : うん。 (Ev) October. (P+Em) うん (Ev) October eighth. (Em) Wednesday October eighth ね (Em)。

[Situation 3]

T : じゃあ、before class, I talk about my hobby ね。 I have many hobby. One of them is to watch movie (P). Do you have any hobby? (El) じゃあ Miss Mikuni, what's your hobby? (El)

S : I watch TV (R)

T : うん (Ev). She hobby ... her hobby is to watch TV. (P + Em)

[Situation 4]

T : Mr. Shimada, what's your hobby? (E1)
 S : My hobby is listen to music. (R)
 T : はい (Ev) His hobby is to listen to the music.
 (P+Em) はい。I sometimes go to the movies
 with my friend. I watched "Princess of
 Mononoke" two times. (Ex) Did you watched
 "Princess of Mononoke"? (S) じゃあ I'm going
 to watch "Fifth Element" (S) "Fifth Element" (S
 + Em) だれか見た人おる? (S) "Fifth
 Element" (Em)

[Situation 5]

T : I'm going to watch the baseball game tonight.
 (P) I'm going to watch the baseball game
 tonight. (P) これはどんな意味かな? (E1)
 I'm going to watch the baseball game. (P+
 Em) はい。Raise your hand. (D) 分かる人お
 らん? (E1) じゃあ Miss. Nakamura, please.
 (E1)
 S : 私? (Con)
 T : うん (R) I'm going to watch the baseball
 game tonight. (Em)
 S : 私は今夜... (R)
 S : はい
 S : 野球を見に行くつもりだ。 (R)
 T : うん (Ev) はい。ね、思い出してみて。(O)
 be going to これは「～するつもりです」とい
 う。(P)

[Situation 6]

T : Let's go together, Ken. (P) Let's go together,
 Ken. (P) Ken は "OK, let's go" て言った?
 "I'm, sorry, I can't go" て言った? (E1)
 S : (誰かが答える) (R)
 T : うん。うん。(Ev) 何て言った? (E1) "I'm
 sorry, I can't go." て言った? (E1)
 はい Mr. Funabayashi.
 S : くらはし。(R)
 T : くらはし? はい、ごめんね。(S) Kurahashi.
 (E1)
 「うん行ける」て言ったかね。それとも行け
 んって言ったかね。(E1)
 S : 行けない(R)

T : うん。(Ev) 行けんって言ったね。(P+Em)
 "I can't go." (P+Em)

[Situation 7]

T : Ken はなんで、今日野球を見に行けないと
 言ったかな。なんで、今日野球を見に行けな
 いと言った? (E1)
 S : (誰かが答える) (R)
 T : うん? はい、じゃあ...何て言った? (E1)
 S : 今夜は忙しい。(R)
 T : うん (Ev)。"I will be busy tonight." (P+Em)
 もうひとつ。(E1) あっ、はい。Miss Sugimoto.
 (E1)
 S : I will study English. (R)
 T : はい。(Ev) I will study English ね。(P+Em)
 ここで will が使われていました。(P)

[Situation 8]

T : この will はどんな意味を持っていると思
 う? どんな意味で使われているのかな?どん
 な時に?何を表すときに? (E1) 推測でもい
 いよ(O)。分かる人? (D) じゃあ、Miss Obu.
 will はどんな時に使われると思う? (E1)
 S : 未来を表すときに使われる。(R)
 T : うん、そうやね。(Ev) この be going to さっ
 きでてきた be going to とよく似ていて未来
 を表すときに使うのがこの will やね。(P)

[Situation 9]

T : はい、じゃあちょっと聞いてみようか(O)
 What's your plan tonight? What's your plan
 tonight? (E1) 今晚のご予定は何ですか。予定
 は何ですか(E1) それを will を使ってちょっ
 と答えてみてくれるかな(O)。じゃあ、ちょっ
 と当てるよ(O)。じゃあ Mr. Kubo, please.
 What's your plan tonight? (E1)
 S :
 T : To study English? (E1)
 S : I will, I will study English. (R)
 T : うん。Good. (Ev) He will study English. He
 will study English. (P+Em)

[Situation 10]

T : じゃあ、Miss Yokota, what's your plan

tonight? (E1)
 S : I will.... (R)
 T : Oh, private school. (Em) She will go to private school. (P+Em) OK? (Con) こんな風にして、今日はこの will を使った言い方を勉強します。(P)

[Situation 11]

T : This weekend is three day holiday. This weekend is three day holiday. (P) 今週末はうれしいこに3連休やね(S)。じゃあ what day is October 10th? what day is October 10th? (E1) はい、じゃあ前ちょっと向いてよ。(O) はい、10月10日は何の日かね。What day is October 10th? (E1)

S : 体育の日(T)

T : うん? (E1)

S : 体育の日(R)

T : うん。(Ev) 体育の日。(P+Em) It's Sports Day. Sports Day ね。(P+Em) はい I want to know your holiday's plan. I want to know your holiday's plan (O) ね。What are you going to do this weekend? What are you going to do this week end? (P) わかったかな (Con)

Team Teaching

NS -- Native Speaker (ALT)

NNS -- Non Native Speaker (JTE)

[Situation 1]

NS: I went to Kokura to see my friend.(P)

NNS: わかった? (Con)

NS: Kokura (Em)

NNS: 小倉 (Em)

NS: Kokura (Em)

NNS: Where is Kokura? (E1)

Ss: 小倉 ... (R)

NNS: 小倉ってどこにある? (E1)

S: 新幹線で行ける (R)

NNS: In Kyushu. (Ex)

NS: Yeah. (Ev) It's in Kyushu. (P+Em)

[Situation 2]

NNS: OK. What did you do last weekend? (E1) 何

したかね、3連休。(E1+Em) What did you do? (E1 + Em)

NS: Mr.Imada. What, what did you do last weekend? (E1)

S: I went (R)

NNS: Ahhhh

NNS: Lots study? (E1+Ex)

S: No. (R)

NNS: No? Ahhhh (Con)

NS: Did you play game? (E1) Did you play game? (E1+Em)

S: No. (R)

NS: No? Oh... (R)

NNS: And? (E1)

[Situation 3]

NS: OK. Miss Murakami. What... what did you do last weekend?

S: I go to Sogo. (R)

NNS: Sogo. (Em)

NS: Ah... wow. (Ev)

NNS: Shopping? (E1+Ex)

S: Yes. (R)

NS: Good. (Ev) OK. Thank you (S)

[Situation 4]

NS: Now... Mr. ... what, what did you do last weekend? (E1)

S: (silence) (R)

NNS: Watch TV? Sleep? Watch TV? (E1)

S: (nod) (R)

NNS: Good. (Ev)

NS: OK. (Ev) Thank you. (S)

[Situation 5]

NS: What time is it now? (E1)

Ss: Six o'clock. (R)

NNS: One more again. (D)

Ss: Six o'clock. (R)

NNS: Please "It's" It's six o'clock. (P) Again. (O)

Ss: It's six o'clock.(R)

[Situation 6]

NS: What time is it now? (E1)

Ss: It's two o'clock. (R)

NS: Good. (Ev)

NNS: It's two o'clock. (P+Em)

NS: What time is it now? (E1)

Ss: It's three fifty. (R)

NS: Yes. (Ev)

NNS: OK. Again. (O)

NS: It's three fifty. (E1)

Ss: It's three fifty. (R)

NS: Good! (Ev) What time is it now? (E1)

Ss: It's six twenty-five. (R)

NS: Good. (Ev)

NNS: It's six twenty-five. (P. Em) OK? (Con)

[Situation 7]

NNS: How's the weather? weatherって何? (E1)

Ss: 天気 (R)

NNS: weather (P+Em) このね、二つの言い方を習
おうと思います。(O)

[Situation 8]

NNS: I have world map today. I have many
country name, but I don't know the place. (P)
Mr. Peter, where is Tokyo? Where is Tokyo?
(E1)

NS: No? (わざと間違えて地図を指す) (E1)

NNS: It's OK? (E1)

Ss: No. (R)

NS: Mmm... oh, yeah. (R)

NNS + Ss: Yes. (R)

NNS: I have many country name. Please come to
the board.(D) 前に正しいところに国名を貼っ
てほしい。貼ってくれるかな? (O)